

祖以來本村大字天王寺三千四百八番屋敷に住み、所謂苗字帶刀御免の格を以て、或は年寄役となり、(當地方は古來舊天王寺村に屬し庄屋は遠く現今大阪市南區に住せるを以て年寄役を置けるものなり) 或は此地天滿宮祠官となり、輿望頗る高かりしといふ。此地名利安養寺(尼寺)の如き、(次編第二章第四節參照)實に元祿二年(二百三十七年前)の建立に屬するも、同家先人の援助に俟つもの極めて多く。又有名なる同地天滿宮社額『天滿宮』(口繪參照)の如き、後西院の第九の皇女、寶鏡寺宮德嚴理豐尼公御西遊の途次、寺田家に御一泊の砌、特に御染筆を辱ふし、今尙、同家に保管せり。其の他、同村公文、舊記等曾ては極めて多く保存せしも、今は散逸して僅かに拾數點を存するのみ。而かも村内申値、村石高其の他時代資料の優たるもの尠少なからず。

寺田家の地方開發に貢獻せる、歴代孰れも甲乙あらざるべきも、先代善左衛門の彼の野田正教其の他同志と共に大いに天下茶屋繁榮に盡瘁せる。現代善左衛門氏亦夙に本村助役、收入役及び村會議員等に推され貢獻亦尠少なからず。尙、寺田家は此地芽木家と姻戚の關係を有し、且つ大阪市南區木津町唯專寺一に木津御坊とも稱せる迹見家と同族にして、彼の明治大正を通じての女子教育及び畫家としての權威者、跡見瀧野號花蹊刀自の如きも、少き時は同家に起居を同うし、今尙音問極めて厚く、同家居室の畫幅、額面及び紙襖等同女史の筆になれるもの頗る多し。

門正長の三男なりといふ。家素農を營みたりしも、出でて攝津住吉生根神社附近なる、元楠木家乳人某に倚り、遂に紹鷗杜(本編第一章第七節參照)境内に喫茶店を設け、且夕來往銳意隆昌を計り遂に一家を起し、河内屋と稱し累代小兵衛を冒し、以て十三代の現在に迫る。

其の初めて芽木姓を冒せるは徳川末葉以來の事に屬す。蓋し、十一代小兵衛獻金其の他の功あり、故を以て官憲『之れ正に楠木氏の更に芽を出すべきなり、以て芽木を姓となすべし』となせしに基くといふ。即ち芽木氏は近年の稱なるを以て、世に之を知るもの多からざるも、而かも『天下茶屋』の稱に至りては天下之を知らざるものなかるべきなり。而して天下茶屋小兵衛を略して更に之を『天小』とも稱は古來名聲天下に馳す。本村字天下茶屋及び茶屋前の稱の如き、總て皆此芽木氏の天下茶屋より來れるものたり。

初代小兵衛は元龜天正以前に於て既に此地に來り、業を勵み、家を興し、歴代亦切りに隆昌を計り、其の三代小兵衛昌立に至るや、遂に豊太閤駕を枉げ茶を喫せらるるの光榮を荷ひ、爲に『殿下茶屋』若くは『天下茶屋』の盛譽を博するに至れるを見る。蓋し、此地元『清泉』あり、茶道の中興武野紹鷗大に之を歡び、遂に一庵を結び、千利休亦特に煎して豊公に薦む。豊公頗る其の雅味を愛するのみならず、同家在來の『施行茶』を徳とし、爲に『惠水』の銘を賜ひ、且つ年々玄米三十包の朱印をさへ

辱ふするに至れり。

而して、時の休憩所及び『惠水』(口繪及び本編第一章第八節參照)の遺跡歷然として同所に存す。前者は方六尺の小亭にして三方各三尺の長檐を附し、屋は杉皮を以て葺き、天井は竹簧を用ひ、支柱は全部檜丸柱を撰び、而かも前面に二層の階段を備へ、雅趣極めて濃かなり。亭は實に三百幾十年前の設置に罹る朽腐形を存せざるべきも、同家の歴代常にこれの保存に努め、而かも近年に至りては更に鞘屋を覆ひ特に鄭重を極む。後者は即ち之に隣り、今は樟根の爲に遮られて既に水脈を絶つと雖、當年の位置、井桁其の他依然として舊態を存す。

芽木家の由緒及び同家寶物に關しては、今之を宇田川文海翁の考證に譲るとするも、豊太閣の、所謂天下の勢を以てして特に腹心の將相を従へ、而かも利休の手前を以てして紹鷗の遺品を用ゐ、靜かに茗燕を張る、落落たる英雄の心情今尙追懷に堪わざらしむ。

天下茶屋の名聲、然かく四方に馳すると共に、事功も亦更に益々加はるを見る。即ち前陳『施行茶』の行事の如き、規模壯大、行儀慇懃、實に紀州熊野街道に於ける『熊野參詣』其の他に對する慰安事業の尤なるものにして隆昌素より言辭に絶するものありしといふ。

芽木家の先代は管に是等公益慈惠の事に携はるのみならず、其の郷關の事に關し、公私交々盡瘁倦備、文藻あり風雅を樂み、事功顯著なるものあり。而して現代小兵衛其大郎其亦大阪市西區九條町中島家より入りて當家を襲ぎ温厚徳を負ふ。乃ち曾て本村村會議員其の他、公私の職に在りて絶えず公共の事に盡す。養母ハナ刀自今茲齡八十有一を重ぬと雖、鏗鏘壯者を凌ぐの概あり。刀自は西成郡勝間村(現在同郡玉出町)永田又藏の長女にして夙に十一代小兵衛(別項寺田家より入りて繼げるもの)に嫁ぎ貞良克く家を治め、祖先を崇び後昆を慮り、而かも現代に處して些の遺漏なし。邸宅及び別館共に舊觀を改めず。(前章第八節參照)殊に其の土藏の如き頗る堅牢を極む。蓋し、家寶(次項參照)儼存の爲、特に力を致せるものなり。

近來、舊家大家にして逼塞窮狀を極め、又は俄かに没落せるもの比々皆然らざるはなきにも拘はらず、單り芽木氏の天下茶屋は依然として當年の面目を損せず、蓋し、累代積善の餘慶に基づくもの多しと雖、亦以て刀自の采配宜を制せる所以のものならざるべきか。

尙、芽木氏の天下茶屋に關し宇田川文海、玉樹安造の兩氏特に詳細に記述せるものあり、前者は特に(一)紹鷗との縁故を審かにし、後者は一に(二)是齋屋との關係を明かにせり、特に録して參考に供ふ。

一 天下茶屋と紹鷗

天下茶屋と紹鷗に就ては前年二三の雜誌其の他に紹介に努めたるも、其の際は只『攝津名所圖繪』に因て『天下茶屋村天満宮の

境内は民有地第一種百九十一坪あり。本堂・庫裡・玄關・藥醫門を有するも、堂宇頽廢、今や牆壁大いに破れ、一見寺院の態を失へるを以て、現任職梯了訓氏、切りに復興を期するを見る。

第三節 正 圓 寺

正圓寺は大字天王寺字天狗塚一千三百十九番地に在り。海照山と號す。不動明王を祀る。大小の堂宇巍然として聳ゆ。境内別に歡喜天堂及び釋迦堂等あり。丘上老松(寄松)の參差たる、眺望の絶佳なる、本村唯一の景勝たり。俗に聖天山と稱す。寺屬の地域約三千八百坪、内、官有地二十一坪を有す。眞言宗古義派明承院末なり。今を去ること九百八十四年前天慶四年僧光道の開基にして、阿倍寺千軒の一房たりしものならんか。正圓寺の前身は般若山阿倍野寺と號したりしといへり。該寺は(東成郡誌には般若山阿倍寺と記す)は大坂夏の役の兵火其の他の厄に罹かれること數數なりしといふ。

阿倍野寺は、元、八宗兼學たりしが、天草の亂後、宗規改正の結果眞言宗に屬して今日に至れるものの如し、既にして元祿年間京都の僧常如來つて現今の地を相し、移轉再興に努め山號及び寺號の如き實に此時を以て改めたるものなり。山を負ひ海に面し、眺望極めて佳なりしに由るものの如し。後、享保八年十二月を以て大和國生駒山寶山寺弟子義道來住大いに復興に努め、茲に隆昌の基を奠め

ならんことを冀ひ、遂に慈覺大師に依つて祈願せしかば、大師乃ち一刀、神跡顯現して、此の地を以て、頼長幾許もなくして京師に歸ることを得たりといふ。

第三編舊跡社宮路塚の遺物にして兼好法師の使用せる藁打石といふは門前右側に「大聖歡喜天」と題せる標碑の礎石として儼存せり。(篠崎小竹筆なりといふ)。又柘榴塚舊趾より得、且つ、紹鷗遺愛の手水鉢と稱するものあり、高さ約三尺、一面に成竹を刻す、古雅愛すべきものあり。

境内中央に歡喜天堂・左、釋迦堂・右、不動堂・御供所・土藏・庫裡・藥醫門の外に稻荷の祠堂あり。寺寶には、脇士十六善神、十一面觀音・地藏菩薩・普賢延命・虚空藏菩薩・不動明王・大自在天・大聖歡喜双身天王・不動明王・浴油木像・弘法大師・中興開山常如等の像あり。

第三編『社宮路塚』の舊跡は今は當時の所屬に歸せるも、現任職辻見旭範氏は常に寺運の隆盛を計り、遂に之れの高地を墾き、以て大いに墓地及び住宅地の經營に資するもの如し。

尚、境内本堂前面に佛戒碑及び雄崎國丸の狂歌塚等存するも、本編第四章第六、七節に記す。

第四節 安 養 寺

安養寺は大字天王寺字天下茶屋六百七十六番地ノ一にあり。境内民有地第一種四百三坪を有す。淨土宗智恩院派に屬する尼寺にして、大阪市南區天王寺逢坂一心寺末なり。昌芳山善心院と號し、阿彌陀

佛を本尊とす。東山天皇の御宇元祿二年、一女官西國の靈地佛閣を巡拜して津の國岸の里（今の天下茶屋）舊家寺田善左衛門を訪ひ一泊を求めしを縁とし、遂に寺田家の賛助を得、此に一草庵を結び、日夜念佛修業する所ありしが、遂に一心寺の天譽和尚を戒師として剃髮得度し、貞譽清薫尼と稱するに至れり。同年三月十四日一字の堂成り、大垂寺と號し、阿彌陀佛を安置せり。享保元年十二月十三日貞譽清薫尼示寂す。二世惠亮尼、相次で寂す。これより先、寛保二年（二百八十三年前）堂宇を改築し、且つ安養寺と改む。

寛延三年十二月晦日（百七十五年前）類焼の厄に遇ひ堂宇焦土に委せらる。寶曆二年九月四日（百七十三年前）四世智圓尼、妹智誓尼及び信徒と力を戮せて再建の功を奏す。此の時梵鐘成る。智圓尼、本寺中興の祖たりしに遂に安永元年九月十九日（百五十四年前）を以て示寂す。明治二十年四月廿日四世信了の代に至り、不幸火を失して本堂及び庫裡を失ふ。後、現住十五世明了尼、同廿二年十月を以て庫裡を建て、越えて三十三年五月十一日、本堂を建設せり。これ現今の堂宇なり。

本堂の外に庫裡・客殿・玄關・座敷・鐘樓・表門・阿彌陀堂等を有す。本尊阿彌陀如來の坐像一軀は木製座像丈二尺四寸、中興智圓尼の安置する所のものなり。阿脇土觀音勢至二、菩薩木製坐像二軀、各丈一尺六寸臺座三尺四寸を供ふ。兩大師木製立像二軀、丈各二尺四寸を有す。

當時の重寶は實に阿彌陀如來木製丈六尺の坐像なり。像は大小實存當年、一千八百六十年前來の佛工陳和卿勲（本寺に作れるもの）、胎内（一尊佛）、木像なり。今も佛工陳和卿勲の刻するものなり。頗る精巧を極む。傳へいふ、本像は實に孝謙天皇の御持佛三像中の一にして、元、住吉郡朴津の郷（安立町附近か）七堂伽藍に安置せるを、後、住吉村に移し、更に明治五年、十三世秀音尼（明治十八年九月一日寂）官許を得、遂に當寺に奉移せるものなり。然りと雖、前記失火の際、信徒幸ふじて搬出以て難を免かれたるも、時の後光船形十二光佛を配せるもの及び蓮臺等悉く焼失せりといふ。

該像は境内別に一字を作り、特別保存に努む。乃ち鐵筋コンクリート式に刻り、特に防火の設備を整へ且つ壯麗を加ふ。俗に稱して『大佛堂』若くは『三千佛』（口繪参照）と稱へ、崇敬極めて厚し、蓋し、堂内大佛を中心として四周遍く小佛像を安置せるを以てなり。境内墓塋幾百を存す。中に就き、猪名川彌右衛門、土肥積翠、油煙齋貞柳狂歌塚、蝙蝠軒狂歌墳、及び紙屋治兵衛妻おさんの墓と稱するもの其の他を存するも、別項塚墓の條に譲る。

境内又別に一堂宇を設け、地藏尊を祀る。蓋し、大同年間高僧某の作に關る。元、開基清薫の念持佛たりしも、示寂後、三十年を経て、親戚大阪長町山鹿屋勘兵衛に傳へ、勘兵衛更に延享年間を以て當時に納めたるものなりといふ。

第五節 淨明寺

淨明寺は惠日山と號し、大字天王寺字經立千二百二番の二にあり。眞宗西本願寺派末にして阿彌陀

口、兒童數其他累年表

年度別	兒童總數	就學歩合	卒業生數	學級數	教員數
大正十年度	七三八	九九九	一二七	一三	一四
同 十一年度	一、一八〇	九九九	一五八	二〇	二二
同 十二年度	一、三二二	九九九	一一〇	二四	二五
同 十三年度	九一六	九九九 〇二二 六七一	一四〇	一八	一九

八、現在校長氏名及び就職期限 眞野 一 自大正十年一月八日 至現在

二、所 屬 團 體

1、天下茶屋教育會 豫て村教育會第四支部として活動し來りしも、大正十一年四月、會則變更と共に大いに振興を期し、正會員三百五十四名、特別會員十一名を有す。本年度經費金百七拾圓を以て敬老會、兒童修學旅行、水泳練習會、子供洋服手縫、毛糸編物講習會等を催せり。

2、天下茶屋同窓會 大正十一年四月十五日を以て發會式を擧げ、爾來、本校卒業生を以て組織し、會員の向上、親睦を圖るを以て目的とす。會長矢野一氏、幹事八名あり。一箇年二三回集會を催し、或は遠足、或は演劇、或は運動、或は...

一、概 況

大字天王寺字金塚村有池敷に在り。大正十二年三月、校舎建築に着手、同年九月七日、工を竣ゆ。同年九月十九日第四小學校より四百五十七名、第二小學校より百四十名の兒童を分割收容と同時に開校式を擧げたり。敷地坪數一千八百坪にして、校舎坪數三百七十八坪二合五勺を有す。内本館三百五十一坪一合五勺にして教室十七、教具室一、應接室一、宿直室一、屋内體操場兼講堂一、職員室一、使丁室一、兒童控室一、玄關車寄木造瓦葺一坪三合二勺、妻葺下下家木造丸葺平家建十坪一棟、職員便所二坪七合八勺一棟、生徒便所八坪一棟、傳廊下三坪なり。

口、兒童數其の他の成績左の如し。

兒童總數其他調査表

年 度	兒童總數	就學歩合	卒業生數	學 級 數	教 員 數
大正十二年	六五六	一〇〇、〇〇〇	六七	一二	一四
同 十三年	七八八	一〇〇、〇〇〇	九六	一六	一九

八、現在校長氏名及び就職年月左の如し。

現在校長氏名及び就職 森下喜之助、自大正十二年七月二十日 至現在

二、所 屬 團 體

1、學校後援會 大正十三年二月十日創立に關る、之より先き大正十三年一月より數回に亘り發起人を開き、遂に發起に關する諸案を議決の上、同年二月十日保護者大會を開催し、滿場一致を以て可決成立と同時に發起人を評議員となし、以て學校教育の完成を計り、更に社會風教の振興を期す。乃ち兒童の見學、旅行、教職員の研究援助を初めとし、各種講演會、講習會等を開催して一に振興を圖るを以て目的とす。而して經費は會員の會費及び有志の贖金に據るものとす。會長には校長森下喜之助氏を推舉し、以て現今に迄べり。

2、天龍婦人會 大正十二年十月以來切りに本會の創立に努め、遂に同十三年十一月十八日を以て盛に發會式を舉行せり。會は本村第五尋常小學校學區内に住居する滿十七歳以上の女子を以て組織し。事務所を同區小學校内に置く。而して、會の目的とする所は、家庭教育、家事、衛生其の他文化生活の向上を計り、且つ、會員相互の親睦を計るにあり。従つて其の事業としては講習會、練習會、見學、敬老會及び貧困者誘導、住居、職業の相談、音樂會、遠足會又は旅行、其の他文化事業に貢献するものにして、着着實績を擧げつつあり。現在會員二百二十六名。會長には現任校長森下喜之助氏、副會

六、天王寺第六尋常小學校

1、概 況

大正十二年三月、大字天王寺新池二千八百六十二番村有池敷に位置を撰定し、更に校舍の建築に着手し、同年七月十八日工を竣ゆ。同年七月二十三日、第一小學校より六百十八名、第三小學校より二十六名の兒童を收容し、開校式を舉行す。本校は校舍敷地三百七十五坪六合七勺、敷地總面積二千坪教室十七を有す。外に屋内體操場兼講堂一、理科室一、下駄箱傘棚置場所一、應接室一、宿直室一、小使室一棟あり。此創設に要せし工事費中重なるものを擧ぐれば、敷地整理費一萬二百三十九圓二十錢、校舍建築費九萬八千五百七十七圓三十二錢にして總計一萬八千三百九十六圓五十錢なり。

尚、兒童數其の他の情勢を見るに左の如し。

□、兒童數其の他調査表 (九月現在)

年 度	兒 童 總 數	就 學 步 合	卒 業 生	學 級 數	教 員 數
大 正 十 二 年	七 三 三		九 八	一 二	一 三
同 十 三 年	九 〇 九	一 〇 〇, 〇 〇	一 四 八	一 七	二 〇